



Title	GLOCOLブックレット12 序
Author(s)	福田, 州平
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 12, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48370
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序

福田州平 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任研究員

21世紀に入り、グローバルな諸課題に取り組む人材育成と関連して、一時軽視されていた教養教育の重要性が叫ばれるようになった。たとえば、2010年に公表された日本学術会議『提言 21世紀の教養と教養教育』では、グローバルに人類が直面する現代のさまざまな問題・課題を分析し、解決方法を構想し、そして実行する基盤として「教養教育」を位置づけている。たしかに、教養の重要性は、複雑さを増す現代社会に生きる人間として実感しうるところである。しかしながら、こうした教養教育の重要性をもとめる言説のなかには、新自由主義的なグローバル競争のなかで「生き抜く」ため、あわよくば「勝つため」に、ある一定の思考の型に学生を当てはめようとする危険性もみられる。教養教育が現在直面する諸課題への取り組みの基盤を本当に提供するためには、社会をよりよい方向に変えていくための批判的な知と、人間と自然を含むさまざまなものとの共生のための知の2つの要素が最低でも要求されることだろう¹。

本書は、2011年度に開講された全学共通教育科目「現代文化を読み解く」の講義内容を基にしている。講義は、学部初年次を主たる対象とし、なるべく理解しやすいように「現代文化」なるものを批判的に読み解くための道具や材料をとりあげた。その内容は、批判的国際関係学(Critical International Relations)への序奏となることを意図し、オリエンタリズムや文化的ヘゲモニー論、批判的テロリズム研究や人間の安全保障、あるいは近代とポスト近代の問題など多岐にわたった。平易な語り口に努めたが、いわゆる一般教養科目としては、内容的に少々歯ごたえがあるものだったかもしれない。また、講師の学術的未熟さや教育経験の不足に起因する難解さもあったかもしれない。しかし、この講義をきっかけに、現代社会思想的な問題に関心を示す学生や、あるいは決して平易とはいえないエドワード・サイードの『オリエンタリ

¹ 教養教育における「批判的な知」と「共生のための知」の重要性について、筆者は石井ほか(2010)から示唆を得た。

ズム』を読み始めたと講師に報告しにくる学部一回生もあり、批判的に現代文化を読み解く一定の目標は達せられたのではないかと思う。

もっとも本書は、講義内容を講義時のスケジュールや内容をそのまま収めているものではない。講義における受講生の反応などを踏まえて、構成や内容をかなりかえている。また、グローバル共生に向けた基礎力の涵養、すなわち「批判的な知」と「共生のための知」としての教養教育の一助になることも願って、以下のように3部構成とした。

まず、第1部は、イントロダクションとして、「現代文化を読み解くということ」と『「若者の内向き論」について』の2つの章を配置する。まず、「文化」とは何なのかについて、語源、およびカルチュラルスタディーズや国際文化論などの議論をとりあげる。そして、比較的広く使われる文化の定義、つまり「生活の工夫」としての意味に加え、第2部での内容につなげる意図から別の角度からの議論をつけくわえつつ、議論を行う。つづいて、近年、しばしば話題にのぼる「若者の内向き思考」について、実際に講義で寄せられた受講生の意見および各種データから検討を行い、一見もっともらしい慣用的な言語表現が、実は特定の社会である一定の意図のもとに「現実」として構築されたものなのだとすることを議論する。

「若者の内向き思考」の議論から、当たり前のように語られ、そして同意しているモノの見方を解きほぐす方向へと話を進めたい。そこで、第2部は「知の政治学」と題し、「オリエンタリズム」、「ヨーロッパの普遍主義とテロとの戦い」、「テロロジーと批判的知」について講義する。最初に、サイドが提起したオリエンタリズムをとりあげる。ミシェル・フーコーの言説の議論やアントニオ・グラムシのヘゲモニー論を援用しながら、「東洋」と「西洋」の間に設けられた思考様式をとりあげたサイドの議論は、現代文化を読み解く上でも有用なはずである。そして、このサイドの議論に関連して、イマヌエル・ウォーラスティンが指摘する「ヨーロッパの普遍主義」もとりあげる。世界的に普遍的な装いをもっている概念が、実はある一定の範囲(=ヨーロッパやアメリカ)での普遍主義にすぎないことをウォーラスティンは指摘する。本書は彼の議論を紹介しつつ、その典型的な例とも言える対テロリズム戦争もとりあげる。そして、対テロリズム戦争の知的基盤となったテロロジーについて、批判的テロリズム研究の議論を下敷きにして、その知と政治について論じる。

第3部では、第2部での議論をさらに広げ、近代的な装置やシステムとそれが引き起こす問題、そしてそれをどう乗り越えていくのかについて話をすすめたい。そこで、「近代を超えることはできるか?」と題して、「博覧会を読み解く」、「近代の限界とサステナビリティ」、「グローバル・クライシスの時代」、「人間の安全保障」についての講義を設けた。博覧会は、一見きわめて「文化的」

であり、非政治的なイベントと思われがちであるが、実はきわめて政治的なイベントに他ならず、そして近代化推進のための装置として機能してきた。博覧会をはじめとするさまざまな手段によって国家は近代化をすすめてきた。しかし、20世紀後半になると、こうした近代化や近代国家の営みが破綻をきたしつつあり、サステナビリティや多文化共生といった概念が登場してきている。また、環境問題や金融危機など地球規模の危機も生じ、これまでとは異なる共生のあり方が課題として浮上している。そのためには、ヨーロッパの普遍主義ではない普遍的普遍主義が求められている。その糸口として、ここ20年ぐらい研究者や実務者などの中で議論されてきた「人間の安全保障」という考え方を紹介する。

なお、補講として、筆者が2012年6月に香港大学SPACEで行った講演をもとにした「落語の政治学」を収めた。落語の噺からそこに含まれる政治的なものを抽出しつつ、なぜ落語が広く受け入れられてきたのかを論じている。

本書の試みがどこまで達せられたか、まったくわからないし、きわめて心もとない。現代文化というとても巨大な存在を前にして、ドン・キホーテ、あるいは螻蛄の斧などのコトバが筆者の頭にちらつく。しかし、本書を手にとられた方々が、通常の「国際政治学」や「国際関係論」と少々違ったパースペクティブからグローバル共生にむけた「何か」を少しでもつかむための手助けになれば、望外の幸せである。

引用文献

石井潔、尾関周二、中西新太郎

- 2010 「座談会 批判的(知)の復権と課題」唯物論研究会編『唯物論研究年誌 第15号 批判的(知)の復権』大月書店、8-52頁。